

<前回：20世紀脳科学と宗教論2>

(1) 問題状況

1. 「脳神経科学とキリスト教思想」というテーマに向けて。20世紀の議論の整理。
2. 近代以降の自然神学の歴史的展開：「物体／物質→生命」という問題領域の拡張。
 - ・1980年代以降。「心」という領域への「宗教と科学」関係論の進展。
3. 従来のキリスト教自然神学から、仏教を含めたキリスト教以外の諸宗教の伝統と科学との関係性までも視野に入れた、自然神学構築の可能性。1980年代、とくに90年代以降、欧米の宗教研究。ダキリとニューバーグの共同研究として始まった研究は、MRIやfMRIによる脳機能の画像化を利用して、宗教経験や美的経験における、組織・場所と機能の相関性の解明を目指す。

4. 脳神経科学が解明する脳機能と宗教経験において問題となる心とは単純に直結できるものではなく、両者の間にいくつかの媒介項を設定する必要がある。

・哲学の役割：議論で使用される諸概念を明確に規定し、議論における論理の飛躍を批判的に検討する。脳神経科学で問題となる神経システム・有機体である脳と心（心的活動）との関係。

心1：対象化された心。 心2：経験され生きられる心、志向性としての心。

こころ：心1と心2を包括する人間の心的活動。→社会・共同体・歴史といった領域での人間の心的活動＝精神活動。

5. リクール『記憶・歴史・忘却』。記憶と忘却の問題系との関わりにおいて、解釈学的現象学の立場から、次のような議論を行っている。

6. リクールの指摘：脳神経科学が解明しようとする「脳と心1」の領域において「構造—機能」の相関関係を因果関係として展開することの正当性に対する問題提起。未だ正当化がなされていない論理の飛躍（「どんな科学にも固有の覇権主義的傾向が隣接科学に対して及ぼされる」（同、208））が存在するという事。

7. 「脳神経科学とキリスト教思想」というテーマ。新しい議論を展開するというよりも、本来可能であった議論を再考する。問い直しの手がかり。

8. 還元主義と全体論という二つの思想系譜。

・1880年代以降の現代宗教学の諸理論：還元主義的宗教学（マルクス、フロイトらの宗教理論）と全体論的宗教学（エリアーデらの宗教現象学的な理論形成など）。

・現代宗教学を超えた科学論全般に及ぶ広範な問題領域：還元主義的宗教学は、実証主義的近代科学（機械論的科学モデル）と同一の科学理念に基づいており、還元主義の形而上学的前提を共有。還元主義とは別の理論構築、還元主義に対して全体論的思惟が行う一連の問題提起。19世紀後半以降、実証主義的思想系譜に対する哲学的批判の存在を確認することができる。それは、自然哲学の復権や形而上学の再構築といった問題意識と結びついた、ジェイムズ、ホワイトヘッド、ベルグソン、デュルタイ、トレルチ、シェーラーなどの思想家。

(2) 20世紀の脳科学と宗教研究

10. ジョン・ヒック『人はいかにして神と出会うか——宗教多元主義から脳科学への応答』

11. ヒック：宗教多元主義の代表的論客として知られる宗教哲学者、宗教経験の合理性の問い（超越的実在に関わる事柄を経験した人間が自らの経験を受け入れるのははたして合理的なことであるか→宗教的実在論）との関わりにおける宗教哲学。

宗教経験あるいは宗教が非合理的な迷信であるとの宗教批判に対して宗教を擁護しようとするならば、現在脳科学が宗教に対してなす挑戦に正面から取り組む必要がある。

12. 脳科学が宗教になす挑戦の内容は多岐にわたっている。ヒックが紹介する科学作家リタ・カーターによる要約(同書、23)。

宗教経験は「もっぱら妄想であると主張する重大な論拠」(同書、23)として活用される。

13. 自然主義的な脳科学研究。自然主義とは証明された科学的命題ではなく、一つの世界観、一種の「宗教的」信念なのであり、脳科学の研究者の多くはそれに素朴に依拠。

「唯物論者である哲学者のジョン・サールは、実際に次のように発言している。『唯物論が私たちの時代の宗教であるという感覚は確かにある』」(同書、4)。

14. 自然主義も宗教も、実際にはそれぞれ単一的な立場ではなく、複合的な諸立場の集合体である。具体的な問題状況の分析においては、さらに細かな区分を行わねばならない。

・「ハードな、つまり唯物論的な自然主義」と「ソフトな自然主義」(同書、4)とを区別することにする——ヒックによれば、宗教体験を十全に論じ得ないという点では、ハードもソフトも結局は同じである——。

15. 議論の枠組み。脳と心の関係論における、心脳一元論、随伴現象説、デカルト的実体論的な物心二元論を含めた何らかの仕方での二元論。

17. キリスト教思想にとって、心脳一元論(不可分)も二元論(別物)も、理論的にはいづれも可能であり、それは進化論がキリスト教思想にとってもつ関係に似ている。

(3) ヒックの宗教哲学の立場

18. 心脳同一論〔Mind-brain Identity Theory〕批判。脳は何かしら特殊な物理的状态ないし過程であって、意識はその脳神経活動、つまり脳の電気化学作用に他ならない、とする理論)と呼ばれる議論。強い自然主義あるいは還元主義的物理主義(唯物論)。

21. 「問題は、意識的体験と脳内の物理的出来事とが相関ではなく、同一のものであるということ、どのようにして言いまわることができるかということである。もし相関関係が同一性を構成すると想定するならば、それは論点を先取りした誤りを犯すことになる。両者が同一であるという信念は実験的に確立された事実でも、論理的に説得力をもった論証でもない。それは自然主義的な信仰の表明でしかない。」(同書、34)「相関関係を同一性には変えられない。」(同書、42)

22. 心の哲学は、「心脳同一論を修正する方向」(同書、43)に動いており、様々な新たな理論的提案がなされている。

↓

弱い・ソフトな自然主義。非還元主義的物理主義。

ヒックは随伴現象説(Epiphenomenalism)という名称でまとめている。

随伴現象説とは、「創発性、複雑性、二重性質、機能主義」(同書、27)などを含む。

「意識は脳活動の一時的で非物理的なものとする説」であり、「非物理的な精神過程は脳機能の電気化学的過程と同じくらい実在的」である。「非物質的な実体が存在するという可能性」(同書、26)は残される。

・しかし心から脳への影響・効力(心的因果)は認められず、あくまでも心的なものは物理的なものに一方的に依存する——スーパーヴィーニエンス(supervenience)の原理——。

23. 「随伴現象説はどの形態であっても、意識の存在については説明ができていない」(本書、63-64)との結論。

7. 20世紀脳科学と宗教論2

(1) リベットの実験の意義

1. 「心の哲学」から：脳神経科学に対する哲学的思惟と言っても、現代科学に関して哲学の取り得る立場の多様性に対応して、哲学的思惟の立ち位置も一様ではない。つまり、心脳一元論に立って心の脳への還元を肯定する自然主義的議論から、この還元に対して志向性やクオリアという議論に基づいて異議を唱える議論まで、哲学的思惟もさまざま。

Maxwell Bennett, Daniel Dennett, Peter Nacker, John Searle, *Neuroscience & Philosophy. Brain, Mind, & Language*, Columbia University Press, 2007.

芦名定道「自然神学の新たなフロンティア——脳と心の問題領域」(京都大学基督教学会『基督教学研究』第27号、2007年、1-19頁)。

クオリアをめぐる諸問題。中山剛史・坂上雅道編『脳科学と哲学の出会い——脳・生命・心』(玉川大学出版部、2008年)の「第II部 新たな認知観を求めて——知覚・クオリア・オートポイエシス」に所収の村田純一、信原幸弘、野家伸也の諸論考、また「第V部脳科学と哲学の対話」討論1「心は脳科学によって解明されるのか——脳と心・意識・クオリア」を参照。

2. リベットの実験をめぐる論争。

「自発的な行為を脳はどのように処理しているのか、というのは意識を伴う意志の役割についてと、それだけでなく、自由意志の問題についても、根本的に重要な問題です。……もし内部から生じる意志のアウェアネスまたは行為を促す意図もまた、必要条件である活動時間の最大約五〇〇ミリ秒間の継続時間のぶんだけ遅延するのであれば、意識を伴った意志ある行為を起動する脳活動は、行為を促す意図が十分に発達するよりもずっと前に始まっていることがあり得るように思えます。」(ベンジャミン・リベット『マインド・タイム——脳と意識の時間』岩波書店、2005年、143頁。(Benjamin Libet, *Mind Time. The Temporal Factor in Consciousness*, Harvard University Press, 2004, p.123.))

近藤智彦「脳神経科学からの自由意志論——リベットの实验から」(信原幸弘・原塑編『脳神経倫理学の展望』勁草書房、2008年、229-254頁)などを参照。

3. リベットの实验は、「自発的な行為では、行為を促す意志は行為へと繋がる脳活動の前かそれが始まったときに現れる」とする一般的な考えを疑うことを可能にするものであり、これによって「発声すること、話をする事、そして文章を書くこと」など、これらはすべて、「無意識に起動されるらしい」(リベット、2005、125)ということになる。

↓

リベットの实验は、近世哲学以来の自由意志問題に対して——キリスト教古代の自由意志論争との差異に留意することが重要である——、脳神経科学の側から一石を投じたものとして理解され、それにより、その波紋を哲学的思惟の中に広げるものとなった。

Robert John Russell, Nancey Murphy, Theo C. Meyering, Michael A. Arbib (eds.), *Neuroscience and the Person. Scientific Perspectives on Divine Action*, Vatican Observatory Publications, 2002.

4. リベット自身。自由意志の存在を一貫して擁護。

星川啓慈「神経生理学とユダヤ教——決定と自由の狭間を生きる B・リベットの場合」(日本宗教学会『宗教研究』377、2013年、129-153頁)

5. ヒック。リベットと同様に自由意志を擁護し、一種の心脳二元論を唱えた。それは、

自由意志の否定論が、道徳性の基盤を掘り崩すことになるとの理由。

ジョン・ヒック『人はいかにして神と出会うか——宗教多元主義から脳科学への応答』
法藏館。

6. 決定論と自由意志論との対立構図は、道徳性や責任性という実践的問題とその背後にある人間理解をめぐって展開されたのであり、脳神経科学（リベットにおいては生物脳研究）はこの問題圏に触れるものとして哲学的な論争の中にあるのである。

（2）脳科学と近代的人間論

7. 近世哲学以降の問題状況：自然科学によって決定論的に記述される外的自然と自由の領域としての内的精神という二元的な問題系（カント→19世紀哲学→現代哲学）。

この問題系の前提＝独特な人間理解。

8. ハイデッガー：近代的思惟の特質。「我々は近世的学の本質を省察し、その中に形而上学的根拠を認識しようとする」（「世界像の時代」（ハイデッガー全集第5巻『杣径』創文社、1988年、107頁。（Martin Heidegger, *Holzwege*, Vittorio Klostermann, 1950 (1980), S.84.）

9. 「探究としての認識することは、表象することにとって、有るものがどれだけまたどの程度まで意のままにされ得るのかに関して、釈明を有るものに求める。……有るもののこの対象化は或る〈直前に立てること[Vor-stellen]〉において遂行される」（ハイデッガー、1988、107）、「人間が第一のすなわち本来的な〈主体[Subjectum 主語的基体]〉になるとすれば、そのときこのことは、〈人間が、一切の有るものがその有ることとその真理との方式においてそれに基づいているところの有るものになる〉ということの意味する。」（同書、108）

10. 近代的思惟：有るものの全体としての世界を像として表象する。ここに成立する主観—客観図式（「世界が像になり人間が〈主体[Subjectum 主語的基体]〉となるという二つの経過の交差」）が、近世哲学における決定論と自由意志の対立という問題設定の基盤に存在する。

11. 講義『シェリング『人間的自由の本質について』』（ハイデッガー全集第42巻、創文社、2011年）。古代、中世における体系概念と対比しつつ、近代の体系構築が何であったのかを論じる——これは像としての世界とそれを表象する主体という問題と緊密に関連する——。決定論と自由意志論という問題設定は、シェリング哲学そしてハイデッガーのこのシェリング講義（1936年夏学期）の焦点である「自由の体系は可能なのか」という問いにおいて先鋭化される。

12. 世界を客体して表象する自由な主体としての人間自体が、決定論的に規定された世界（外的自然）の一部とされるとき、その自由な主体としての在り方は脅かされる。

↓

脳神経科学（自然主義的）によって心が脳に還元されるとき、それは近代的思惟における主体の否定となる。

13. 問題：この近代的思惟とそこに成立する問題設定自体の妥当性。

決定論と自由意志論とが構成する二元論的な問題設定は、近代的思惟が生み出したいわば擬似的問題ではないだろうか。

14. 小坂井敏晶『責任という虚構』（東京大学出版会、2008年）。

リベットの実験やミルグラム実験との関連で。

「自然因果的発想で意志の源を求める限り、どんな答えを用意しても意志や行為の自由は導けない。問いの立て方自体が誤っているからだ」(小坂井、2008、155)、「自由とは因果律に縛られない状態ではなく、自分が望む通りに行動できるという感覚であり、強制力を感じないという意味に他ならない」(同書、156)、「自由は責任のための必要条件ではなく逆に、因果論的な発想で責任概念を定立する結果、論理的に要請される社会的虚構に他ならない。」(同書、157)。

15. 脳神経科学について近代的思惟の問題系をいわば自明な前提として議論を始めることは脳神経科学からキリスト教思想への展開を困難にする。

問われるべきは近代的思惟とその人間理解の方であり、脳神経科学とキリスト教思想との関わりは、人間理解という観点から問い直されねばならない。

(3) 社会脳研究と人間理解

16. 次回からのテーマである社会脳研究は人間理解(問いとしての人間)にどのような仕方関わっているのでしょうか。

17. 社会脳研究者である藤井直敬は、「社会と脳の関わり」を論じる導入的事例として、「『自粛』という世論」、「異様な愛国的キャンペーン」や「意図的な大規模メディア操作」として現れる「社会的権威による強制力」へ言及(藤井直敬『ソーシャルブレインズ入門——〈社会脳〉って何だろう』講談社現代新書)。

↓

社会心理学などの研究対象。

17. 「ミルグラム実験」: スタンレー・ミルグラムが、1961年に、ホロコーストの大虐殺の社会心理的メカニズムを理解するために、権威への服従実験として行った。1963年のその成果が「服従の行動研究」(Behavioral study of obedience)という論文で発表。それは、新聞広告で、「学習と記憶に関する実験」への参加者を募集し、二人の被験者を先生と生徒(サクラ)にわけ、生徒に単語の組み合わせを暗記し思い出すという課題を課するものである。生徒が間違った回答をすると先生役は罰として電気ショック(次第に電圧を上げる)を与えることが求められる。先生役は、別室の生徒が発する予め録音された悲鳴を聞きながら電気ショックを与えるのであるが、白衣をきた博士風の男の権威的な指示に従って、基本設定では40人のうち25人が450ボルトの電気ショックを与え、実験者が止めるまで実験を続けたと報告されている。

「被験者が、自分の行動の結果として他者を傷つけていることがわかっていながらも、それが権威者からの命令だとしたら断ることができるかどうかという実験」(藤井、2010、148-149)。

18. 「人の倫理観は絶対的なものではなく、そのときの社会状況に応じていかようにも変化し、権威付けがあるなら、何でもやりかねない」(同書、155)、「わたしたちは、本質的にきわめて脆弱な倫理観と、無意味に保守的な傾向を持った生き物なのだ。」(同書157)

19. 社会心理学においてこれまで蓄積されてきた議論は、確かに社会脳研究で参照されるべきものであり、キリスト教思想への接続を試みる上で成果が期待できる。

20. さらに注目すべきは母子関係(乳幼児と母親)に関わる一連の実験。

板倉昭二「成り立つ心——赤ちゃんの心の発達」(京都哲学会『哲学研究』578、2004年、61-79頁)、「赤ちゃんから見た世界」(京都哲学会『哲学研究』591、2011

年、1-21 頁)。

21. 本講義は、次の論文を整理して議論し直している。

・芦名定道「自然神学の新たなフロンティア——脳と心の問題領域」(京都大学基督教学会『基督教学研究』第 27 号、2007 年)

・「脳科学は宗教哲学に何をもたらしたか」(星川啓慈・芦名定道編『脳科学は宗教を解明できるか?』春秋社、2012 年)

・「脳神経科学と宗教研究ネットワークの行方」(井上順考編『21 世紀の宗教研究——脳科学・進化生物学と宗教学との接点』平凡社、2014 年)

・「脳神経科学からキリスト教思想へ」(京都大学キリスト教学研究室『キリスト教学研究室紀要』第 2 号 2014 年)

・芦名定道「脳科学とキリスト教思想——人間理解をめぐる」(東西宗教交流会『東西宗教研究』Vol.14、2015)。

・「宗教哲学にとっての脳神経科学の意義」(宗教哲学学会『宗教哲学研究』No.35、昭和堂、2018 年)。